特定非営利活動法人
名称変更しました!
日本がん登録協議会（旧称：地域がん登録全国協議会）
JACR Japanese Association of Cancer Registries
NEWSLETTER 年3回発行
JACR ニューズレター
February.2017 No.41

2005年 保健文化賞 受賞

2016年 朝日がん大賞 受賞

「本当に増えているがん、減っているがん」シンポジウム開催報告

西野 善一 副理事長
金沢医科大学医学部公衆衛生学

昨年11月12日にJACRと日本医師会の共催で「本当に増えているがん、減っているがん」—がん登録推進法施行1年を経て—と題したシンポジウムを日本医師会館大講堂で開催しました。がん罹患率、死亡率の推移に関するデータは対策の立案や評価を行う上で欠くことができないものであり、その現状を紹介するとともに、得られた結果に基づいて今後必要となるがん対策を議論することができればと考え本シンポジウムを企画しました。

「がんを減らすためには何が必要か？」パネルディスカッションの様子。
左から津金氏、日本医師会常任理事の羽鳥氏、
斎藤氏、全国がん患者団体連合会理事長の天野氏、西野。

シンポジウムIの「増えているがん、減っているがんのなぜ?」では、山形、福井、長崎3県の地域がん登録資料より得られた1985-2012年の年齢調整罹患率と全国の1958-2014年の年齢調整死亡率の推移をJoinpoint回帰分析により検討した結果に基づき、4人のシンポジストが推移の背景にある要因について発表を行いました。↗

↘私（西野）は、「減っているがんのなぜ?」として、胃と肝はそれぞれH.pylori、C型肝炎ウィルスの若年層における感染率の減少を反映して年齢調整罹患、死亡率とも近年減少傾向にある一方で、男性肺は、年齢調整死亡率は減っているが年齢調整罹患率は近年横ばいであり、年齢階級別罹患率はわが国の喫煙経験者の割合が1925年生まれを中心として高く1938年生まれ前後で低いとする先行研究の結果と対応するように推移していることを報告しました。伊藤ゆり先生（大阪府立成人病センター）は「増えているがんのなぜ?」として、女性乳房と子宮頸部につき、危険因子と検診が与える影響や減少させるための施策について詳しく説明されました。「注目のがんのなぜ?」では斎藤博先生（国立がん研究センター）が前立腺、津金昌一郎先生（国立がん研究センター）が甲状腺について発表されました。斎藤先生は2000年前後からの前立腺がん年齢調整罹患率の急増はPSA検査の普及と市町村での前立腺がん検診開始の時期にほぼ一致していることを指摘し、過剰診断がんの不利益が大きい前立腺がん検診は、対策型としてではなく希望者が十分な情報提供を受けた上で受診を自己決定する任意型として実施することが必要であることを述べられました。津金先生はわが国で年齢調整罹患率が増加傾向を示している甲状腺がんについて、検査の普及による診断数の増加が罹患数に強く影響を与えることを内外の知見に基づいて説明されました。

シンポジウムⅡの「20年後のがんの光景は？」では片野田耕太先生（国立がん研究センター）が最新の成果による2035年の日本のがん罹患数とその部位別内訳の将来推計を、堀芽久美先生（国立がん研究センター）がGLOBOCAN2012に基づいた2035年の世界のがん罹患

次ページへ続く→

前ページの続き→

↘数の将来推計を発表され、先進国に比べ途上国における増加率が大きいと予想されるなど興味深い内容が紹介されました。

「がんを減らすためには何が必要か?」と題したパネルディスカッションでは、司会の祖父江友孝先生（大阪大学）から、次期がん対策推進基本計画の内容に関し、全体目標の指標として従来の年齢調整死亡率と解釈がしやすい死亡数の↗

↘いずれを用いるのが適切か、罹患率を指標することは妥当か、および必要な対策は何かという問題提起がなされ、5人のパネリストを交えて活発な議論が行われました。

今回のシンポジウムはがん登録をこれからの対策に活用していく上で大変有益であったと考えます。最後になりますがご協力、ご協賛をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

左手前から西野氏、羽鳥氏、天野氏、今村副会長、垣添氏、中釜氏、左奥から杉山氏、堀氏、大木氏、斎藤氏、祖父江氏、津金氏、伊藤氏、片野田氏